

学校教育全体を見直す重要なポイントを示唆しているものと受け止めることができる。

特に、低学年の教育では、子どもの発達上の特徴（未分化、興味本位、活動的である等）や幼児教育との連絡等を考慮するなど、子どもを前面におしだした学習活動を組織することが必要になってくる。まさに、生活科はこのような役割を担う中心的な存在であり、その責任や価値はきわめて大きいと言える。

(二)生活科のめざすもの

次に示すものは、昭和六十二年十二月にだされた文部省教育課程審議会の「生活科のねらい」からの抜粋である。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への

の基礎を養う。

このねらいは、これからの低学年教育を創る指針になるとともに、教育課程編成上のいくつかの重要な視点（学習の目標・内容・方法）を具体的に指摘している。

①学習の目標——自立への基礎を養う——

身近な自然や社会に積極的に働きかけ、それらの事象を主体的に受けとめ、自己の力を最大限に発揮しようとする心情・意欲・態度を育てることである。

②学習の内容

子どもの興味・関心を大切にしながら、身近な自然や社会とのかかわりの中から学習素材を見つけ、それらをもとに学習課題を設定すること。社会生活に必要な最低限のマナー（礼儀作法・公共物の利用等）を身に付けさせること。生活上必要な技能（ぞうきんのしぼり方等）を習得させることなどが考えられる。

③学習の方法

この生活科のねらいは、具体的な活動や体験を通して学ばせることを重視するなど、子どもの発達段階や学び方の実態に適合しうるものと思われる。

以上のように生活科のねらいを理解したとき、幼児教育と低学年教育の連絡は、右の②や③の項目を実際のな接点として考えていくことが大切であろう。

(三) 児童の生活体験の実態

生活科の単元は、教師と児童とのやりとりの中でつくられていくことが基本である。教師は、目の前にいる児童にどんな活動や体験をさせ、どんな内容をどのような方法で学ばせることが望ましいのかを考えなければならぬ。その際、幼児教育での活動や体験との接続を考慮することが大切になってくる。

では、幼児教育では、どのような活動や体験を実際に行ってきたのであろうか。次に示すものは、本学附小の第二学年（男児十九名、女児二十名）の児童にアンケート調査（質問紙法）を行ったものである。三十九名の児童

のうち、およそ半数が附幼の出身者である。

(質問1) 幼稚園では、どんな遊びをしましたか。

(1) 砂場では、高い山を作ってトンネルをほって遊びました。(I男)

(2) 砂と石でおだんごを作りました。(U子)

(3) 動物園がきてくれて、うさぎや馬やにわとりがたくさってきたので、馬に乗ったり、うさぎをだいたりしました。(S男)

(4) うさぎとにわとりがいました。よく私は、にんじんやはこべをうさぎやにわとりにあげました。すると、うさぎとにわとりは、よろこんで食べてくれました。

(N子)

(5) おいもほり、ぶどう狩り、どんぐり拾いをしました。

(B子、H子、F男)

(6) 海へ行って砂で山を作った。地びき網をみんなでひいたらエイがいました。(D男、E子)

(7) お花つみをしました。(M子)

(8) 草むしりをしたのをごはんにして、ジャングルジムで

おままごとをした。(S子)

(9) ぼくは、大きいブロックで家を作ったり、車りんのついたブロックをつなげて乗りものにしたりしました。

(K男)

(10) おかしやさんごっこ。山でたんけんごっこ。電車ごっこ。けいさつごっこ等

(11) サッカー。リレー。野球。かくれんぼ。ドッジボール。ブランコ。すべり台。等

(12) 折り紙。たこ作り。おめん作り。家作り。本読み。お絵かき。歌をうたう。体そう。げき。お人形あそび。

かげ絵。等

(質問2) 一番楽しかったことは何ですか。

(13) 一番楽しかったことは、十人ぐらいで砂場に水を入れて遊んだことです。その水の中にプラスチックでできた車で遊んだことです。(Y男)

(14) 私が一番おもしろかったことは、うさぎをだいたことと先生がしてくれたかげ絵のことです。(C子)

その他、固定施設を使う遊び。行事のこと。ボール運

動。野外での食事。工作。おままごと等多種多様である。

(質問3) 幼稚園と小学校のちがいは どんなことですか。

(15) 幼稚園のころは、遊びっぱなしだったけれど、学校は勉強する方が多い。勉強の時間と遊ぶ時間がわかれてくる。(このような内容を書いた児童が多数。)

(16) 幼稚園は自由だけれど、学校は 文を書いたり、教科書を使ったりする。(R男)

(17) 遊び道具があまりない。(J子)

(18) 学校はチャイムがなって、幼稚園ではならない。(Y男)

(19) 幼稚園では、砂場に水を入れられるけれど学校では、入れてはいけないのでつまらないです。(D男)
その他、校庭が広いことや一人机であることなどをちがいにあげた児童もいた。

(四) 幼小連絡の課題

ここでは(三)の幼児教育における児童の生活体験の実態を一つの手がかりにして、幼小連絡(主に低学年の教育課程編成の立場から)についてのいくつかの課題を明らかにしてみたい。

① 体験的活動の接続を考慮する。

(三)の(1)から(4)の項目が示すように、児童は幼児教育において身近な自然や社会の中で、遊びを通してさまざまな活動や体験をしている。

それらの中には、低学年の学習の基礎的な活動や体験になりうるものが数多く含まれていることがわかる。このことから、低学年では幼児教育で行ってきた体験的活動を十分生かし、児童が主体的に学習に取りくむことができるような教育課程(特に、生活科の単元づくり)を編成することが必要である。

② 活動時間を保障する。

本校では、第三学年から時間割に従って学習指導を行っている。そのため、(三)の(18)の項目が示すように、低学年の教室にもチャイムが鳴ることになっている。しか

し、低学年は時間割がないため、児童の実際の活動の様子に合わせて一日の時間を配分することができるシステムをとっている。したがって、個々の児童は、自分の興味・関心にもとづいた活動を、自分が納得のいくまで取りくめる時間的な保障が与えられているのである。一般に、活動や体験を重視した生活科では、活動時間の個人差が著しいことから、一応の時間割を設けたとしても、それを弾力的に扱うことが必要になってくるだろう。

③ 活動や体験を優先させる。

生活科のねらいの冒頭に「具体的な活動や体験を通して……」と述べられているように、幼児や低学年の児童は、何かに興味をもつと、すぐ行動にうつすように、きわめて活動的である。自分の目の前に何か物が置いてあれば、それに興味を示し、教師の指示を待てずに遊んでしまう。また、何か材料を使って製作活動をさせる場合でも、実際の材料を組み合わせるなどの操作をしながらイメージをふくらませることがある。このように、児

童の活動主義的な実態を考慮する時、低学年の生活科では具体的な活動や体験を取り入れて単元づくりを行うことが望ましい。

④生活科の評価。

生活科は、教科の一つであるという位置づけがなされたため、その評価について検討する必要がでてきた。本校の低学年の創造活動（総合的学習）は、次の四つの項目を立て、三段階で評価を行っている。

- 自分で課題を見つけ、よく考える。
- 進んで学習に取り組み、まじめにやりとげる。
- 条件に合わせて創意工夫する。
- みんなと力を合わせて活動する。

このように、低学年の創造活動は、知識・理解・技能といった評価ではなく、児童の心情・意欲・態度といった情意的な側面を重視した評価を行っている。それは、これら四つの項目は、あらゆる学習の根幹をなす重要な

観点であると考えられるからである。

これから実施される生活科は、学習内容の理解度や定着度を評価するだけでなく、本校の創造活動の評価項目のように、児童の情意的な側面に焦点をあてた評価であってほしいものである。

（お茶の水女子大学附属小学校）

